研究発表　分科会 10-1　造形の変位 10 月 15 日（日）13：20-14：00　南館 2B42

# J. W. ウォーターハウスの折衷主義とモダニズム

筑波大学　山口 茜

世紀転換期にロンドンで活動した画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス（1849-1917）に関しては、美術史における位置付けが非常に困難である。ラファエル前派の継承者として目されながらもロイヤル・アカデミー会員として勢力的に活動し、さらに英国内の象徴派や唯美主義、フランスの外光派や自然主義、さらには印象派と、国内外のあらゆる手法を積極的に取り入れた。本発表ではウォーターハウスの作品が英国美術の勢力図式に関する従来の議論を突き崩す契機を提供すること、また、その折衷主義と評された画風が、これまでウォーターハウス作品が評価されてこなかったモダニズムの観点から評価できるものであることを明らかにする。

最初に、1880 年代の英国美術を取り巻く状況とウォーターハウスの折衷主義を分析し、英国モダニズムの萌芽の時代におけるウォーターハウスの位置付けを検討する。アカデミーが当時英国美術界に影響を及ぼしつつあったフランス美術を脅威と捉え排除する向きを強めていた一方、反アカデミーの勢力を中心に 1885 年に設立され英国モダニズムの先駆けをなしたニュー・イングリッシュ・アート・クラブ（NEAC）はフランス美術の手法を積極的に取り入れた。ウォーターハウスは NEAC や周辺の画家からフランス美術の手法を吸収しながら、アカデミー画家としても大きな成功を収めている。彼に対する同時代評である折衷主義が、19 世紀英国においては保守的なアカデミズムと結び付けられていたことに注目し、上記の一見矛盾を孕むスタイルがつくり出したウォーターハウスの特殊な立ち位置を明らかにする。

続いて、ウォーターハウスの作風における大きな転機を示す《魔法円》（1886）を取り上げ、折衷主義の中にモダニズムへの接近をみる。魔女と思しき女性を描いた同作品には、技法や色彩においてフランス美術の影響が顕著であることに加え、神秘主義やオカルティズムへの傾倒をも示しつつ、モチーフには古代ギリシャやエジプト様のものがみられるなど、折衷主義と評されたウォーターハウスのスタイルが凝縮している。驚くことにこの《魔法円》は当時の批評家たちから極めて好意的に受け入れられ、ロイヤル・アカデミーが管理するチャントリー基金で購入された。この点に関して、《魔法円》の翌年にチャントリー基金で購入されたジョン・シンガー・サージェント（1856-1925）の《カーネーション、リリー、リリー、ローズ》（1885-1887）に関するアン・ヘルムレイ（2003）の論考を参照し、《魔法円》がアカデミズムと対抗勢力という既存の対立図式を覆す端緒となること、同時に英国モダニズムの発展に貢献していたことを明らかにする。

以上のように本発表では、多様なモチーフや手法を融合させるウォーターハウスの巧みさと独自性を英国モダニズムの文脈において再評価し、そこから生み出された作品に既存の対立図式を捉え直す契機が存在することを明らかにする。